# 特攻会報

平成11年2月

第38号

〒105-0001　東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人　特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電　話　03(3432)1090

編集人　田中賢一
発行人　木村元正


## 記念すべき十二月八日

大東亜戦争忠魂顕彰会（代表者は我が協会相談役の金城和彦氏）では、今回（昨年）12月8日に忠魂顕彰五十七年祭を靖国神社で挙行した。平成8年に行ったこの祭典のことを、9年2月発行の会報30号の冒頭記事で紹介し、趣旨書も掲げておいたので重ねては述べないが、今回も祭文を奏上したのは若い学徒だったことを強調しておきたい。靖国神社をはじめ各地で行われる慰霊祭に於て、祭文を奏上するのは殆んどが戦友であった老兵だが、このようなことでは、後に続くを信じて逝った英霊の御心に添うことはできない。顕彰会をもって範とすべきである。

ところで現在我が国では、八月十五日は終戦の日として戦没者追悼の様々な行事が催されているが、十二月八日には何の催しもなく、マスコミも記事にしない。従って今の若い者は大詔奉戴日になど知る由もない。私はこの日を次のような理由で記念日として扱うことを提唱する。

その第一は、何故我が国が開戦に踏み切ったかという正しい史実を、顧みて認識する機会となすことにある。歴史の継続性からみれば、大東亜戦争の遠因は日清日露の役、更に遡れば幕末開国の頃から考察しなければならない。その認識があれば、その過程にある支那事変についても、非礼なる北京の客人に教えることもできるであろうに。それはさて措き、直接の原因としては、昭和14年7月、米国は一方的に日米通商航海条約を破棄したことあたりまで遡らなければならぬ。そして米国主導のもとにABCD包囲陣が構成され、16年7月になると我が国の在米全資産を凍結し、全面的な石油禁輸を行った。我が陸海軍は二年を出ずに動かなくなること必至だった。これに対し我が国は万策を尽して対米交渉を行い、譲歩の二案を示したが、米国は実質的には最後通牒ともいうべきハルノートを突きつけてきたのである。

このような正しい史実を現在の国民に周知させる場として、十二月八日を記念日とすべきである。

記念日とすべき二番目の理由は、国家の大事に対する国民の盛り上がりの最たるものを、往時のこの日に見て、以て範とするべきである。対米交渉の行詰りに陰うつな気分の漂う中で、12月8日朝の大本営発表を聞いた国民の歓喜、燃ゆるような国民精神。一見平和に見える現下の我が国をとりまく客観情勢下で、あれと同じ現象を求めるわけではないが、あれほどの国民精神の潜在力があるかどうか危惧せざるを得ない。オリンピックなどの国際競技で、これと相通ずる現象を見ることはあるが、北朝鮮のミサイルが頭上を飛んでも、我関せずでは心もとない。日清戦争の後「臥薪嘗胆」で挙国一致した国民、真珠湾の戦果に躍動した国民、それらのことは歴史教育に俟たねばならないが、現在の学校教育では百年河清を待つに等しいので、せめて十二月八日の開戦記念日をもって戦後の国民に知らしめたいものである。

最後に申したいことは、現在の政治家に対し、当時の政治家の精神を学ばせる場に致し度いということである。近衛内閣から東條内閣に至る政治家達及び陸海軍首脳の骨身を削る苦悩、結果は敗戦に繋ったのではあるが、そこには祖国を思う一念以外、私利私欲など微塵もなかった。現在の政治家も言うだろう、自分らもお国の為を思って苦心しているのだと。しかし、その影には絶えず党利党略私利私欲がつきまとっている。大臣になり度い、その地位を保持したいという名誉欲で臭気ふんぷんとしている。開戦を決っするまでの政治の動きを伝える歴史書は沢山あるが、当時の政治家が己の名誉や欲で事を処したとはどこにも見られない。開戦の日を之等を学ぶきっかけとしたい。

（田中賢一）

目次


記念すべき十二月八日……1
生残り特攻隊員の心境①―続……2
生残り特攻隊員の心境②―続……9
井樋少尉の詩……12
二つの鎮魂碑……14
朗読劇　沖縄はるかに……16
知覧よ……21
（慰霊祭）回天……13
原町……26
川南護国神社……27
明野……28
第一御楯隊……28
会からのお知らせ……8

# 生残り特攻隊員の心境①－続

吉　武　登志夫

（35号に掲載の石腸隊の続編）

## 忘れ難い人達

### 高石邦雄

熊本県、航士54期、下志津飛行学校教官、石腸隊々長、昭19年12月5日先発攻撃隊七機を指揮してスリガオ海峡の敵艦船に体当り散華。

八紘飛行隊　石腸隊長
高石　邦雄　中佐

高石大尉は昭和19年春、独立飛行第54中隊から下志津飛行学校甲種学生に派遣され、教育終了後、第57期乙種学生の教官として教育に当り、自ら教えた学生を率いて石腸特別攻撃隊長としてレイテ海域に散華された。隊長一番の念願は乙種学生で訓練に訓練を重ねた艦船攻撃の成果を十分に発揮させたかったのではなかろうか。

11月21日、前日敵艦載機の攻撃により大半を焼失し、その事情報告に軍司令部に行き夕刻帰隊され全員を集めて「石腸隊員の闘志は極めて高く、乙種学生の訓練では特に敵艦攻撃訓練を十分積み重ねてきており一回限りの体当り攻撃とせず、何回でも思う存分決死の攻撃を繰り返して、戦果を最大限に挙げつづける戦法の採択を懇請したがこの意見は航空軍の特攻の趣旨とは違うものであるとしてしりぞけられた。命令遵奉、俺が真先に突入んで模範を示す」と訓示されて、出撃即全員必死を大悟され集められた8機を直率しネグロス島に進出、12月5日スリガオ海峡を西北進中の艦船に卒先突入散華された。

石腸隊長が11月21日別途の戦法採択について意見具申に及ばれたのは、部下を思い隊を思う真情、ある意味では苦衷の表明でもあったのではなかろうか。しかし決定があれば従容、そして果敢に命令を隊長自ら率先完遂する。これぞ国を護ろうとする軍人精神の權化というべきものであろう。

### 市原哲雄

千葉県、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭19年12月5日石腸特攻隊員としてスリガオ海峡の敵艦船に体当り散華。

八紘飛行隊　石腸隊附
市原　哲雄　大尉

市原少尉の御両親に宛てた最後の便りに、「愈々男子として決然立つべき時機は到来しました。私今日迄ありましたのは、実に今日あるが為でありました。国家存亡の重大局面に死力を尽して突入し、以て微力ながら陛下に尽し奉り親に孝を致さんと存じます。日本臣民として生れ、幸にして忠孝一本の大道を歩み得たる、誠に幸福と存じます。これ一重に御両親様の御薫陶の成果と存じ実に感謝の外はありません。御両親様に対しましては御苦労のみお掛け致し、一として孝養を尽し得ざりしは誠に心残りでありますが、御国に報ゆるは孝たる道とお許し下さい。さして健康ならざる母上様の肩をせめて今一度たたき上げたき気持ちが致します。どうぞ呉々も御健康に御注意下さい－（以下略）－」心優しき武士は己の信念であった「誠のためにし、功名のためにせず」父より載きし白き「シャツ」に必勝のハチマキをしめてスリガオの海に壮烈なる最後を遂げた。

### 大井隆夫

長野県、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭19年12月5日石腸特攻隊員としてスリガオ海峡の敵艦船に体当り散華。

八紘飛行隊　石腸隊附
大井　隆夫　大尉

大井少尉の昭和19年11月25日御両親に宛てた「最後の便り」より抜萃。「－前略－小生勇躍前進基地「ネグロス島」に前進致します。無事目的地に到着し敵艦船と刺違へに散華し得るや、或いは途中戦闘機に喰はるるや、其は一に運命、唯々万全を期し任務達成に邁進

するのみであります。後続の同期生も只今到着、久々に内地の音信を受け破顔大笑。……死ぬとか生きるとか、予科士官学校以来随分と苦労したものですが、今にして何と馬鹿苦労したものだと思われます。身に余る立派な任務。大命、あるのみですあります。殊に小生の死処は言い様もない実に実に甲斐のある大御戦の焦点であります。小生嬉しくて嬉しくて立派に必ず立派に仕遂げる覚悟であります。遙かに仰ぐ敵地の空、グーッと上がって来る闘志、満々たる自信、思わずニッコリと独り微笑ます…以下略…

一降下一撃沈
皇国の運命を負いて征く桜花の
蕾ぞ散りて甲斐はありける

目を瞑れば豪放な大井少尉がバナナ林を渡る夕風に吹かれながら、久々に内地からの音信を受け「破顔大笑」する様を憶い浮かべる。

## 片岡正光

熊本県、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭19年12月5日石腸特攻隊員としてスリガオ海峡の敵船に体当り散華。

八紘飛行隊　石腸隊附
片岡 正光 大尉

片岡少尉は小学校を卒業すると直ぐ山口県岩国市の倉田薬局に勤めそこでこつこつ勉強をしながら陸軍工科学校の試験を受け見事合格、勉学に励みながら隊勤務を経て陸士、航士と進んだ立志伝さながらの努力の人であった。老父に送った最後の便りに「父上様、私の眞価を発揮する時が参りました。日本男児として、そして又父上様の子として立派に皇国に殉じます。今や皇国存亡の決戦に臨んで居る日本人は総べて生死を超越し、一すじに任務を完遂し皇国を守護し奉るべきであります－以下略－」　彼は厳しい訓練進行中にも武者小路実篤の人生読本や夏目漱石の著書を次々と読み了へ。「人生は誠なる哉」「真面目は人間の勝利」を痛感する等、人生の機微を味う余裕を見せ潤いの豊かなる武士の一面をもった人柄であった。

## 下柳田弘

鹿児島県、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭19年12月5日石腸特攻隊員としてスリガオ海峡の敵艦船に体当り散華。

八紘飛行隊　石腸隊附
下柳田 弘 大尉

下柳田少尉は鹿児島県知覧にすぐ近い指宿の生れである。柔道初段、細面で色黒く見るからに精悍な維新の志士を思わせるような風貌であるが、寡黙で心やさしく内に闘志を秘めながら目立たない人柄であった。

彼の寄書には「唯秘中ノ武運を祈る下柳田少尉」とある。後年、中学の柔道教師、高橋先生は「出撃するからと朝早く挨拶に来てくれたが日頃と変らずにこやかに対応され、出身校の上を低空飛行をして別れを告げ南に向かわれたが、よもや特攻とは……」と語られた。昭19年12月2日バゴロド前進の朝、国旗に「天皇に仕えまつれと我を生みしわがたらちねぞ尊かりける」の古歌を墨書、死を前にして故郷の御両親に思いを馳せられたのであろうか。

## 山浦　豊

千葉県、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭19年12月5日石腸特攻隊員としてスリガオ海峡の敵艦船に体当り散華。

八紘飛行隊　石腸隊附
山浦 豊 大尉

山浦少尉は出陣前の寄せ書に「礎石、山浦少尉」とのみ書き残している。彼は喜怒哀楽をあまり表に現わさずいつも飄々としたところがあり、巧まずして冗談を飛ばして周囲を笑わせていた。その笑顔からは何とも言えない春風駘蕩とした印象を抱かせる人柄であった。死に直面した苛烈極まりない戦陣にあって山浦少尉のように、春風が吹き渡ってゆくような楽しい雰囲気作りの出来る者があったと言う事は、今にして思えば秋霜烈日の感ある隊員が多々あっ

たなかに、春の小川がさらさら流れるような全く貴重な存在ではなかったろうか。三途の河原で冗談を飛ばして皆の者を笑わせている姿を髣髴とさせる。

## 増田憲一

長野県、少候24期、下志津飛行学校助教、57期乙種学生の戦技指導に当る。昭19年12月5日石腸特攻隊員としてスリガオ海峡の敵艦船に体当り散華。

八紘飛行隊　石腸隊附
増田 憲一 大尉

増田少尉は徴兵前に現役志願し下士候操縦学生として熊谷飛行学校を卒業、実技訓練を終了して飛行第44戦隊に着任したのは昭15年4月であった。同年5月から開始された宜昌作戦を皮切りに、少候24期生として戦隊を去るまでの4年間中国大陸の空を翔け巡った。彼は温厚な人柄で、沈着、危急にあたって動じない典型的な空中勤務者であった。操縦技量は抜群で常に困難な任務を完遂した。下飛校では教官高石大尉を補佐しながら、よちよち歩きの雛鳥達の戦技向上のためどれ程苦労されたことかと思わずいられない。自らが教えた57期隊員と共にスリガオ海峡に華麗なる炎となって燃え尽きた。辞世の歌に――

「菊の香を添へてレイテの海原に　君の御盾と征く身栄えあり」とある。

## 伊藤誓昌

愛媛県、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭19年12月8日石腸特攻隊員としてオルモック湾の敵艦船に体当り散華。

八紘飛行隊　石腸隊附
伊藤 誓昌 大尉

伊藤少尉は12月7日夕刻、井樋少尉と共にようやく整備のできた飛行機でネグロス島に前進してきた。大東亜戦争の天王山とまで言われたレイテ島の攻防戦は敵が西岸のオルモック湾に進攻し、我が軍の腹背に迫った事によって重大な局面を迎えた。8日オルモック湾には米軍の輸送船約30隻、巡洋艦等艦艇およそ30隻が終結してオルモックの南イビルに上陸作戦を展開したので、第4航空軍はオルモック湾の敵艦船群を攻撃するため暗雲たれこめる天候に拘らず各戦隊の出動可能機を挙げて出動させた。昨日前進して来たばかりの伊藤少尉は整備未了の我々を残して決然、特攻隊としては唯一機これに加わり散華した。でき得れば我々の整備完了を待って集中攻撃により共に戦果を挙げたかったと、悔やまれてならない。

## 井樋太郎

佐賀県、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭19年12月12日石腸特攻隊員としてレイテ島バイバイ沖の敵艦船に体当り散華。

12月12日、やっと飛行機の整備ができた。昨夜来の雨がまだ降り続く早朝、石腸隊井樋、安達、吉武、各少尉、八紘隊、円心隊各一名はシライの第2飛行師団司令部に集合、レイテ島バイバイ沖には100隻を下らぬ目標があると聞く。7時頃雨も小雨となり空も明るみを増してきた。いざ出撃。安達機は離陸の際不幸にも浮揚せず、機体損傷のためルソン島に帰還して後日を期することとなった。吉武機はエンジン不調、辛うじて離陸したが他機より遅れ後を追ううち、グラマン4機につかまり回避中被弾しセブ島沖マクタン島に不時着した。石腸隊では井樋少尉一機がバイバイ沖の敵艦隊に体当り散華した。

八紘飛行隊　石腸隊附
井樋 太郎 大尉

井樋少尉の両親に宛てた最後の手紙に

「神州不滅、信ずること厚きが故に、祈る心切なるが故に、淡々たる心境にて征きます。我が父は神の父なり。我が母は神の母なり。降る霜の白髪となるも　清くおはしませ。」

昭和19年11月23日　　太郎拝

彼は葉隠の伝統に育まれつつ「武士道とは死ぬことと見つけたり」というきびしい精神的な感化とともに文学的な才能にもめぐまれた「文武両道の

士」でたあった。彼は生い立ちから死の直前迄を流麗な歯切れのよい七五調の長い詩で綴っており、そのすぐ後には辞世として次の歌がしたためられてある。

数ならぬ身にはあれど　日の本の
歴史書くてふ　その一しづく

## 安達　貢

島根県、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭19年12月22日石腸特攻隊員としてミンドロ島サンホセ沖の敵艦船に体当り散華。

八紘飛行隊　石腸隊附
安達 貢 大尉

12月13日、ミンダナ方島北部のカガヤン監視哨は北方海上約80粁付近を西進中の多数の艦船群を発見した。15日未明、敵の大兵力は我が予想よりも一歩深くミンドロ島西南端サンホセ附近に上陸を開始した。我が航空主力の第2飛行師団が展開するネグロス島は敵の後方に取り残される形勢になった。大本営は作戦指導の重点をルソン島の防衛に移した。

18日ミンドロ島サンホセの飛行場に敵小型機の進出が認められた。21日又もミンドロ島に向う大船団が発見された。

22日ルソン島ポーラックより石腸隊の安達少尉は殉義隊の一式戦2機と共にこの方面の敵艦船に体当たり散華した。

安達少尉は音楽好きで常に我々を楽しませてくれていた。12月5日隊長と共に出撃したがエンジン不調で引返し、12日の出撃では離陸浮揚できず、度重った不運に彼の焦操は如何ばかりであったか想像に余るものがある。12月11日家族に送った最後の手紙に「ー略ー昨日は丹心隊を送り、日の丸の旗を振りながら泣いていた処を写真班に撮られて弱りました。ー中略ー輸送船を狙ってヤンキー2千名を道連れにしてやりたいものです。故郷の裏山の一番見晴しの良い処へ分骨していただきたいものです。ー以下略」　22日ミンドロ島南西部サンホセ沖に展開中の敵艦船を攻撃、故郷を「山青く水清き隠岐よ」と呼んだ安達少尉は再び還らなかった。我子への切々たる思いを籠めて歌に托された母上サク様の短歌の一部を収載させていただく。

吾子着る　姿ゆめみし初ごろも
袖を通さずのこる悲しさ

## 細田吉夫

宮城県、航士56期、下志津飛行学校教官、石腸隊副隊長、昭20年1月5日ルソン島西方海域の敵艦船に部下2機をひきいて体当り散華。

八紘飛行隊　石腸隊附
細田 吉夫 大尉

昭20年1月5日午後、司令部偵察機がクラーク西方海面から蜿蜒数百粁に亘り北上する空母22隻を含む600余隻の大艦船群を発見した。もはや議論の余地なくルソン島に上陸企図と判断された。18時、第4航空軍は全力特攻を命じた。石腸副隊長細田中尉、林、杉町各少尉は一誠隊3機、進襲隊1機と共にこれに突入、体当たり散華した。

細田中尉は我々乙種学生の教官として実技の他にも生活指導のため課外我々の宿舎にしばしば足を運ばれた。生活指導と言うよりも我々の勝手な苦情処理に悩まされた事と思う。又石腸隊長亡きあと、隊員達の間だに虚ろな気持ちが漂いはじめた中にあって、副隊長として士気を鼓舞していかなければならなかった重圧は並大抵のことではなかったと思われる。彼の人となりについて、同期生菱沼氏の追憶の中に「彼は小兵でズングリ型、厚い唇の周囲に無精髭と、少年の部類には属さなかったが、入馴っこい笑顔には大変魅力があった。日頃剽軽で照れ屋の細田君だが、私はひそかにこういう人物が戦場では本当に強い軍人になるのではないかと思っていた」と。

## 林甲子郎

和歌山県、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭20年1月5日石腸隊員としてルソン島西海域の敵艦船に体当たり散華。

飛行機の都合でネグロス島に前進できず、苛立たしい気持ちでポーラックに待機している隊員の心境を林少尉は次のように書き送っている。「遙か急を告ぐる風雲を望みつつ時に臥竜雲を

八紘飛行隊　石腸隊附
林　甲子郎 大尉

得ず荏苒後方に永らう。隊長殿を始め七神既に神まかります時に不覚の涙なきにあらず。戦局未だ楽観を許さず吾人に期待されるる極めて大なるに翔るべき翼なきを如何にせん。されど来る暁に必ずや天晴れの戦果、目に物見せてくれんと存じおります。骨だに還らぬ身には恰好の遺品とて小指を斬りて、古武士に倣い血書せるを御贈り致します」。

しばらく出撃の機会がなく髀肉の嘆をかこっていた石腸隊員にもその機会がめぐまれ、昭20年1月5日、副隊長細田中尉、杉町少尉と共にルソン島西海域の敵艦船団に体当たり、散華した。

## 杉町研介

東京都、航士57期、下飛校乙種学生修了、昭20年1月5日石腸隊員としてルソン島西海域の敵艦船に体当たり散華。

八紘飛行隊　石腸隊附
杉町 研介 大尉

杉町少尉は温厚実直で控え目であり、あまり目立たない性格の人であった。また遺族の方々もわからず残念ながら資料に乏しい。

ただ知覧から大塚蝶様に宛てた手紙が残っている。「―略―飛行機は知覧の地に根を張った如く一向動かうとしません。一昨日、昨日と整備の方は徹夜作業をして呉れますが、どうも意の如くにはなりません。然し本日は少々無理をしても飛んでゆきます―以下略―」

南進途中の苦労がしのばれるが昭19年11月28日には後発も合わせて全員が目的地ポーラックに到達し得た。杉町少尉は飛行機の都合でネグロス島に前進できず、昭20年1月5日細田副隊長、林と共にルソン島西海域の敵船舶群に体当り散華した。

## 岡上直喜

東京都、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭20年1月6日石腸隊員としてリンガエン湾の敵艦船に体当り散華

八紘飛行隊　石腸隊附
岡上 直喜 大尉

昭20年1月6日敵船舶群は果してリンガエン湾に進入した。石腸隊の岡上少尉は鉄心隊2機、旭光隊、皇華隊、皇魂隊の各1機と共にこの船舶群に突入、体当り散華した。

岡上少尉はユーモアに富んだ陽気な性格で皆の人気者であった。御舎弟岡上明雄氏の回想によれば「兄は文、理共に得意であったが加えて画才に秀で、特に手先の器用さで人望を集めていた。陽気で遊び好きで親分肌の気風をふりまいて学校でも人気者であった」と。

彼は戦場でも陽気にユーモアを振りまいて皆を楽しませていた。12月9日大塚蝶様に宛た最後の手紙の一節に「―略―、いそいそと毎晩、今晩は！今晩は！と伊藤屋にいった。二階で下で我物顔に、のざばり歩いた日が懐しい、お蝶さんが笑いながら教えてくれたお茶受けの味もわからなかったが、それでも、その事が懐かしい。夜は銚子の話、分教場での話、上官や伊藤屋の人や――お蝶さんのスバラシキ「タンカ」をキルまねに至るまでの話のハズムこと。―中略―もうそろそろネタがなくなりました。ここまで送って来てくれた香川少尉にこの手紙を托しました。多分受けとられるころには我々も散っていることと思います」昭20年千葉の正月は空襲警報が頻発するさ中に明けましたが、直喜の家の玄関脇の雪柳に一輪の花が咲いた。この狂い咲きを家族は直喜の戦死と受けとめてその冥福を祈り忽然と逝ってしまった直喜を偲んだ。

7日リンガエン湾の敵船舶群は動かなかった。我が特攻攻撃により上陸準備が進まないのである。しかし敵機の飛行場攻撃は益々激しく滑走路に飛行機を運び出す事さえ決死の作業であり、払暁、薄暮のほかは発進できない状況になった。

8日特攻隊は払暁から攻撃を開始した。

石腸隊の上野、鈴木各少尉、時田曹

長は皇魂隊3機、一誠隊3機、精華隊3機、進襲隊2機と共に敵艦船に突入散華した。

## 上野哲弾

山形県、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭20年1月8日石腸特攻隊員としてリンガエン湾の敵艦船に体当り、散華

八紘飛行隊　石腸隊附
上野 哲弾 大尉

上野少尉は剛毅な性格で訓練においても積極果敢なところがあったが、反面人に対してはよく面倒を見て世話をするやさしい面を持ったさわやかな性格であった。井樋太郎の母堂が鹿児島の果て、知覧の場所さえ分らず打ち沈み切った気持ちで駆けつけた其処で「私、上野であります！」とニコニコ笑いかけた上野少尉からの元気のよい挨拶を受けた時、何とも言いようのない救われた思いがした、と述懐されたとのことである。上野少尉の最後の日誌に、「15時30分命令受領、ルソン島西方海面サンタクローズ沖空母ニ対シ必死必殺ノ攻撃ヲ加ヘントス。唯々成功ヲ神カケテ祈ルノミ」

今迄に散った戦友とも今日再び会える事を期待してサンタクロース沖の敵艦船に体当たり散華した。

たらちねの教守りて今ぞ発つ
仇し雲ち得でなど斃るべき

## 鈴木敏治

愛知県、航士57期、下飛校乙種学生終了、昭20年1月8日石腸特攻隊員としてリンガエン湾の敵艦船に体当り散華

八紘飛行隊　石腸隊附
鈴木 敏治 大尉

鈴木少尉は旧制中学校卒業後、長兄を扶けて家業に励み昭14年現役兵として入営、その間絶えず勉強して16年春陸士に合格、転科して陸航士、下志津、銚子と前後5年余に亘り厳しい研鑽を積んだ努力の人であった。又性温和にして寡黙、いつも静かな人柄であった。

11月3日の壮行会の支給された菓子を家に持って帰るようにと母の手に託したとか、当時何も甘味品のない時代に妹と甥を喜ばせようとの優しい心遣いであった思う。鈴木少尉の比島よりの最後の便りは実に淡々と記してあり、恰も比島へ旅行にでもきているようであり肉親の悲しみを思いやる優しさが「近況御報告迄」にとどめてしまったものであろう。

温和の中に熱烈な闘志を秘めて尽忠報国の至誠ひとすじに国の安泰と必勝を希い、後に続くものを信じて体当りを敢行したと信ずる。

## 時田芳造

東京都、昭11年兵、曹長、下飛校助教として57期乙種学生の戦技指導に当る。昭和20年1月8日石腸特攻隊員として、リンガエン湾の敵艦船に体当り散華

時田曹長は昭11年兵として入隊後下士官候補として操縦の道に進み飛行第10戦隊に配属された。昭16年12月比島進攻作戦に従軍、バターン作戦、コレヒドール作戦に参加、昭18年7月ニューギニア島ブーツに移動しニューギニア東方作戦に従事し、昭19年6月下志津陸軍飛行学校付に発令された。彼の実践部隊で磨かれた技倆と豊富な経験は航士出身乙種学生の飛行訓練の助教としても十分に発揮された。彼の性格は温和そのもので微かな笑み持ち対話を交す悠暢な姿は今も深い印象を残していると旧戦友は語っている。

八紘飛行隊　石腸隊附
時田 芳造 少尉

乙種学生を卒業したばかりの未熟な我々にとって、この熟練し比島の地理に明るい歴戦のつわもの時田曹長の存在がどれ程頼みになったか計り知れないものがあった。自ら教えた57期の若鳥と共に石腸隊の最後を飾ってリンガエンの敵艦船に体当たり散華した。

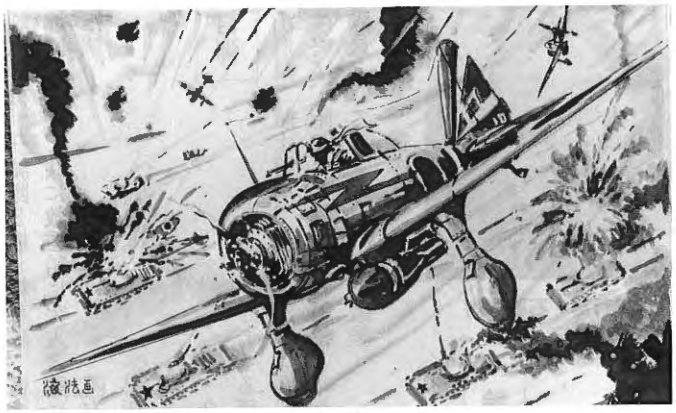
時田曹長は新婚早々、57期乙種学生の助教という因縁で特攻隊に編入され新妻を残して出陣するその心情は全く測り知る事もできない。

## 追悼

あれから五十有余年生き残りの我々もいつの間にか馬齢を重ね、戦没同期生達の三倍を越える老醜の身となった。目を閉じれば今も若々しい石腸隊員の温容が目に浮ぶ。短いながらも勝つ事を信じ、後に続く者のある事を信じ、敗戦を知らず、純粋無垢の一途な生涯を祖国に捧げた彼等と、敗戦の祖国、汚濁の世相に、怨念の日々を送る我と、果たして、どちらが幸福だったであろうか？

今はただ石腸隊諸勇士の追悼を記し、靖国の英霊永遠に安かれと祈るのみである。

吉武合掌



少飛会海法画

## 「特攻勇士の像」建立!!

平成11年3月半ば完成を目指して、現在像の制作が進められている。飛行服に身を固めた像の原型は文化勲章受賞北村西望師作である。この原型に基いて、日本芸術会員北村治禧氏の監修により、日展会員石黒光二氏が制作に当っている。設置場所は靖国神社遊就館玄関向って右の植込みに決定。

3月20日、除幕式を予定している。

## 「戦没特攻隊員遺詠集」の刊行

平成10年1月、刊行委員会が発足し以来数次にわたって委員会を開催。その間、陸海軍戦没特攻隊員の遺詠を収録し発行に向けて努力を重ねている。歌の総数は一、四〇〇余首。発行日時は未定。

（事務局記）

## 事務局より
## 年会費納入のお願い

当協会は歴年会計となっておりますので、一月から新年度になります。年会費は前納を基準としておりますが、毎年2月発行の会報にご案内を差し上げ、会費その他の払込伝票用紙を同封致しておりますので、それにより納入をお願い申し上げます。なお前納されている方には、その旨振込票に明示しておりますので、為念申し添えます。

# 生残り特攻隊員の心境②―続

熊倉順策

**編者註**　37号の対談記事の末尾に記載しておいた通り、時間切れとなり個々の人物についての回想にまで話が及ばなかったので、後日書いてもらった。

## 忘れ難い人達

### 奥山隊長

最も強く印象に残っている人といえば、それは何といっても奥山隊長です。陸士53期でしたから、あのとき26才になるかならない年齢だったでしょう。私は今75才、どこをとっても、当時のあの人に及ぶところはありません。私が及ばぬどころか、現在日本の各界の指導者だって、信念、責任感、度量、統率力、何をとっても到底奥山隊長さんには及ばぬと思います。奥山さんは日本の落下傘部隊創設の初からおられたそうで、昭和16年挺進第一聯隊が編成されたとき、この中隊の先任将校で、その後中隊長になられたと聞いております。小隊長や古参下士官など、早くからこの中隊にいた人達ですから、心の底から奥山隊長に心服していました。従って何も言わなくても、部下はついて行くという気風でした。

私達のように経歴が違い、しかも後から入ってきて軍隊経験も乏しい者に対しても、何の分け隔てもなく、以前からの部下と同じように取り扱ってくれました。包容力があるということでしょう。そのような隊長でも悩みはあったと思います。意気込んでサイパン攻撃を準備したものの、飛行隊の練成が間に合わない、そのうちに硫黄島中継が不能になる。硫黄島なんか使わないで直路サイパンまで行ける飛行機はないものか、B－29は往復しているではないか、我々は片道でよいのだ。こんなことを将校室で夜遅くまで話し合うことがしばしばありました。そんなときに隊長がよく言った言葉は「何をくよくよ川端柳」、これは度々聞いた言葉でした。我々に対して言うのではなくて、自分自身の悩を打消す為に言っていたのだろうと思います。

浜松に移ってから、明日は出撃だと準備、その晩は特攻食といって大そう御馳走が出ました。翌日になると硫黄島が空襲を受け滑走路が使えないので延期ということが何日か続きました。その頃下士官の間で、義烈空挺隊をもじって〝愚劣食放題〟と言う言葉がはやりました。それを聞いた隊長は、「ぐれつくいほうだいとはうまいこと言ったもんだ」と笑いましたが、そこには一抹の淋しさがあったのでしょう。私共もその頃の状況に翻弄されていたのですが、今考えると豪放磊落な隊長も、うまいことをいうもんだと笑った裡に、深い悩みがあったのだろうと思います。私と同じ機に乗っていて生き残った和田曹長の話では、ある寒い日に隊長室に何かの用事で入って行ったら、隊長は底冷えのする部屋の中で、窓際に置いてある金魚鉢を見詰めており、「当番室に湯が沸いていたら持ってきてくれ」と言われたそうです。お茶ですかと問うと「湯だ、この金魚も寒かろう。湯を入れてやろう」と言われた。そこには何か深い悩があるようだったと、和田曹長は話していました。百三十数名の命を預かっていて、なかなか決行できない統率上の悩は大きかったのでしょう。

サイパン攻撃が取り止めになって、それから再転して、愈々沖縄攻撃となるのですが、特攻協会作成のビデオには、健軍出撃時のニュース映画が取り入れられており、奥山隊長の肉声を聞くことができます。出撃時の訓示で〝待望の日は遂に到来した……〟と言っておられます。我々もそうでしたが、待望の日という一言の中に、隊長の深い思いが籠っています。ビデオのこの場面、私は何度見ても感慨新なものがあります。

まだまだ奥山隊長の思出は尽きないのですが、私の生涯脳裡に焼きついて消えない入物像です。

奥山隊長が示した「攻撃訓」

一つ一斉滅刺と
二つ任務絶対　俺がやる
三つ三人三世ぞ　戦友ぞ
四つよく見よ敵を　準備を早く
五つ剛胆沈着　腹を据え
六つ無駄弾打つな　大事な弾ぞ
七つ七生報国　早まるな
八つ早くしっかり装着点火
九つここが墓場ぞ　しおどきぞ
十で尊き任務ぞ　あくまで頑張れ

奥山隊長

## 三独飛隊長
## 諏訪部大尉

豊岡基地に於て、体躯堂々の奥山隊長が全隊員の前で「只今サイパン攻撃の命を受け、特別攻撃隊義烈空挺隊を編成した。全隊員一丸となって任務に邁進しよう」と朗々と宣言し、ついで細身の諏訪部隊長は、淡々とした口調で「全機サイパン必着を期す」と決意を披歴されました。中野学校出身の我々は、乾坤一擲のこの壮挙に参加できることに感動しながらも、制空制海権を敵に奪われて洋上一点の虎穴に到着できるのか、重大な関心を抱いていたが、諏訪部隊長の凛々しい言葉を聞いて懸念は霧散しました。そして地上戦闘訓練に全力を傾注しのでした。編成後は皆同一宿舎で起居を共にしましたが、日ならずして菅原軍司令官が宿舎内を巡視され、慈愛に溢れた言葉をかけられ、上層部の期待と責任の重大さを銘肝しました。地上隊員と飛行隊員の訓練は別個で、しかも夜間訓練が多いので寛いだ交流の時間は限られていましたが、時々地上隊員は搭乗飛行体験と機外脱出訓練を、飛行隊員は地上装備でB－29爆破の訓練を実施して、一心同体の団結と総合戦力の強化をはかりました。

猛訓練のうちに待望の出撃時を迎え、奥山隊の精強さは揺ぎないものだったが、飛行機の方は必死の訓練にも拘らず、長途の夜間洋上飛行が危懼されて決行が延期となり、遂に作戦中止に突き落とされました。切歯扼腕の諏訪部隊長は部下隊員と共に捲土重来必ずこの無念を晴す機会があると言って、我々と別れました。

唐瀬原基地に戻った奥山隊は、特攻隊の隊名は堅持し、大本営陸軍部虎の子部隊の誇持を失はず、一般訓練に精出していましたが、硫黄島作戦に参加するとて、西筑波飛行場に移りました。ところがこれも立消えとなり、諏訪部隊とも縁が薄くなってしまいました。

4月1日沖縄本島に敵が侵攻し、三度目の出撃命令を受け熊本健軍飛行場に前進しました。数日後に砂塵舞う飛行場近くの森の中の三角兵舎に、諏訪部隊の人達が、やあやあの挨拶で一段と冴えた面魂で乗り込んできました。お互いに尋ね人に巡り合った感動の中で、手を握り合って、諏訪部隊の顔には自信溢れた熱気が感じられました。約束通り六ヶ月後に義烈空挺隊編成当時の全員が、健軍飛行場に集結完了し、サイパン攻撃と同じ編成で沖縄北・中飛行場を攻撃することになったのでした。

諏訪部隊長は武人の精悍さより真摯な文人肌で、学徒出身の我々と意気投合の様子で、飄々としてよく我々の部屋に来られました。我々はいつも隊長の胸襟を開いた話し振りに引かれて、戦況だけでなく雑学についても、垣根のない話題で親しみ打ちとけ合っていたので、飛行隊に対する杞憂は起りませんでした。しかし奇襲でできるサイパン攻撃とは異り、夜間とはいえ戦場のど真中で熾烈な対空砲火を冒して、性能の劣る中古の搭乗機に一沫の不安はあったが、それは諦観せざるを得ませんでした。いよいよ出撃が間近に迫り、連日最後の仕上げ訓練や携行装備に余念がなかったとき、諏訪部隊長が一番機操縦者の川守田少尉を伴って、素彫りの未完成の観音像を持って来られました。俺の手彫りだがもう少しで出来上る。開眼を頂き今度は観音様が一緒だから絶対に成功だと、一人一人の身近に観音様をかざされました。

我々は諏訪部隊長の隠れた器用さに驚嘆すると共に、連日の激しい訓練の合間に、精魂込めて彫り上げた気迫に触れ、唯々圧倒されました。そして使命貫徹の精神と、天佑を待つ信仰心、更には特攻隊指揮官の孤独な悲願のようなものを感じとって、愈々畏敬の念を深めました。私は生家の山に観音堂があって、幼い頃よく参詣しました。母が観音様はお前の心の中におられると諭されたことの追憶が忽然と蘇り、諏訪部隊長との一期一会の御縁に感銘しました。そして部屋を出て行かれる隊長の後姿が観音像に見え、心の中で合掌する思いでした。

5月23日午後携行食も渡され、出陣式では陸軍航空最高指揮官である菅原軍司令官が臨場され、壮行激励と軍装検査の為一人一人の前を巡視されました。親父に会った思いで、緊張感よりも懐かしさ覚えました。

定刻になり各搭乗機の前に到り、故郷に訣別の挨拶をし、三度目の正直と

軽口を交す隊員の平常心は、千金の重みがあったが、如何んせん沖縄方面天候不良の情報が入り、またまた延期となりました。

翌24日、部隊結成六ヶ月間の紆余曲折に耐えた隊員は、初心忘れることなく、さらりと陽気な笑顔で出ていきました。豪放磊落な奥山隊長、冷静沈着にして重厚な諏訪部隊長、この組合せが一人も欠けることなくここに至ったものと、追憶は尽きることがありません。

軍司令官に申告、奥山隊長は「我ら一同喜び勇んで行きます」と言う。ニュース映画に録音が残っている。

## 中野学校二俣分校出身の阿部少尉と原田少尉

二俣分校出身の同期で義烈空挺隊に入ったのは6人いますが、阿部、原田の2名は、特に忘れ難い思いがあります。私を含めた3人は入営前満州にいて、17年12月当時はハルピンに駐留していた歩兵第30聯隊に入営しました。

中隊は別で、聯隊内幹部候補生集合教育が初対面でした。19年2月に甲幹30名は、豊橋予備士官学校に10期生として入校しました。8月に卒業し、30聯隊から一緒だった3人は、二俣幹部教育隊に赴任せよと命ぜられました。11月末二俣分校を卒業し、私共3人のほか渡辺、棟方、梶原の計6名が、220名の中から選ばれて義烈空挺隊の一員となった訳で、そこには言い知れぬ因縁があったと思います。

阿部少尉

原田少尉

歩兵30聯隊の初年兵以来同じ道を歩んで来た3人が、沖縄出撃の搭乗機は別でも、奥山隊長の攻撃訓「三人三世ぞ戦友ぞ」の信念で出撃したのですが、私一人落ちこぼれとなってしまいました。先に赴った人達に、いつの日か戦後日本のことを報告せねばならぬと思っています。

中野学校本校から来られた石山少尉は、私共二俣分校の卒業直前の総合演習で私共担当の補助官でした。義烈空挺隊に来て再会しました。また宮越准尉、尾身曹長のお二人は30聯隊出身ということで、いつも近親感を覚えていました。

義烈空挺隊ではありませんが、もう一人私の尊敬する人の話をさせて下さい。それは歩兵30聯隊で私共甲種幹部候補生の教官だった坂本少尉殿のことですが、我々が予備士官学校に入校するにあたって、書き与えて下さった書状がこれです。（巻紙に墨書したものを対談のとき示した。）私はこのように裏打ちして今も大事に保存しております。このとき以来現在に至るまで、私には処生訓となっています。その主なところを読み上げてみますと、

〝自信を失うことなく大和魂の雄叫ぶところ彼の維新の志士の如くあれ、飽くまで小人たる勿れ　己を糊塗して平然たる勿れ　姑息な人間たる勿れ　くだらぬことに低迷する事勿れ　暗雲のうえを行くべし　富嶽の如く十有三州一望の中　発しては万朶の桜　凝りては百錬の鉄　行く所忠の一字　大義の二字　只管己の身の足らざるを憂うべし　務め務めて不已　大いに己の錬成に邁進すべし　充分体に留意されよ　軍旗の名にかけて健斗されよ〟

同聯隊出身の宮越准尉　乾盃時の笑顔

# 石腸隊

## 井樋太郎少尉の詩

――出撃直前の作――

註「忘れ難い人達」の記事にある井樋少尉の作をここに掲げる

怒涛逆巻く玄海に
　彼の白鶴の舞ふ如き
銀砂の濱と虹の松
　幼き頃の思出は
素足で野山を駆け廻る
　ああ大いなる気をすひて
我は育てり十余年

緑に煙る筑紫野の
　多布施の流れ清くして
空ゆく雲の影うつす
　水をながめて啄木と
語り過せし日もありき
　ああ故郷は紅葉して
秋の陽みてるたんぼみち

朝な夕なの通學は
　銀杏の並木白き道
栄の城のほりばたの
　吹く秋風にさそはれて
しだれ柳の葉が落つる

　ああの道をあの樹々を
遥か比島に偲びなん

故郷は楠のまち先哲の
　道をたづねて此の我に
死ねと教えし葉隠の
　うつぼつの気を宿す所
ああ偉なるかな大自然
　ああ偉なるかなその言葉
深きめぐみにいだかれん

いばらの道と人は言ふ
　詭計の花の赤く咲き
母と歩きし田舎道
　歩行し難き世の中を
一歩々々に感じつつ
　ああの土手にて食ひたる
冷たきむすびに降る涙

父の病の篤きとき
　姉と詣でし不動尊
幼き四人の集まりて
　母に贈りしゴム手袋
ああ我がなきあとも同胞は
　一つ心にむすばれて
変るなかれと祈るかな

遠き戦線ノモンハンの
　彼の大空を血に染めし
先輩谷島の跡したふ

振るハンカチに訣別の
ゆかしくかをる梅林
　幼き頃のわが胸に
ほのかに燃ゆる大航空

五年の流れは早き哉
　唯ひたむきにペン執りて
藍きノートのかの香
　赤き辞典のあの手垢
ああわが傍に墨書せる
　必勝の二字を仰ぎ見る
秋の夜長は虫の聲

君が御楯と富士が峰に
　誠を述べし市ヶ谷台
習志野原や静浦に
　予科の月日はすぎゆけり
ああ此の大御世に生れ来て
　馬上に拝す御英姿は
感激の涙にかすむなり

霜ふむ朝のすがすがし
　ここ武蔵野の新天地
玲瓏富士に陽の入れば
　長嘯月にうそぶかん
ああ宣戦の大詔に
　撃滅の意気彌高く
練武に勇む朝霞原

春未だ浅き武蔵野に

　爆音轟く修武台
航空神社に額づけば
　ああ先人の聲はする
大航空に熱愛し
　礎石となりて大空の
宮居に歸せん何時の日か

秋気狭山にみつるとき
　操縦席は禅室と
教へられたるそのままに
　羽搏き初めたり中練の
ああその翼はひなどりの
　よちよち歩きするに似て
今も思へばなつかしや

何時か〇年の日はゆきて
　赤城の雪の消ゆる頃
精鋭五十〇期生
　修武台の碑を仰ぎ
誓ひしことは唯一つ
　我皇軍にさきがけん

仕立下しの軍服の
　新品の名も何時か馴れ
犬吠崎の白濱に
　たはむれ遊びし日もありき
悠々流るる利根の水
　ふとなつかしみたたずめば
宵待草の眼にしみる

驕敵来る不敵にも、
　内南洋やフイリッピン
隠忍自重の日は去りて
　今反撃の機は熟し
抜きて仰がん日本刀
　日本刀のひらめきに
神州不滅に示しなん

その名も芳し八紘の
　若人の血のかたまりて
愚敵は知らずその胸に
　必勝の神算きらめくを
ああ若桜眉あげて
　夜空に星の渡る如
見よ敵艦に吸はれゆく

スコール去りて吹く風に
　何處の空で鳥がなく
庭の何處かで虫がなく
　そよ吹く風も虫の音も
すべて陛下にものなるぞ
　ああ幾山河戦線に
光はみてり大みいづ

高石部隊命中の
　戦果に聞き入る今日此の日
戦死は当然成功を
　涙のうちに祝ふかな
ああきのふまで共に居し
　還らざる友よ来り飲め

祖国の勝利を祈りなん
ああ感激に胸ふるふ
　大和男子の生甲斐に
今出撃の命うけて
　静かに誦す御勅諭
さらば日本よ父母よ
　数ならぬ身も大君の
みたてとならん今日此の日

詩はここで終わっている。そして、すぐ後には辞世と頭書した一首の歌が、四行にしたためられてある。

数ならぬ身にはあれども
　日の本の
歴史書くてふ
　その一しづく

雄健神社

## 平成10年度回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員の追悼式

日時…平成10年11月8日　一三三〇／一五〇〇
場所…徳山市大津島　回天記念館　回天碑前

大戦中に戦没した回天の搭乗員一〇六名ほか隊員を慰霊する式典が、「回天隊」発祥の地、山口県徳山市の大津島において、昭和37年以来毎年盛大に開催されており、平成3年よりは回天を搭載し戦没した潜水艦八隻、八一〇名の乗員を加え、宗教色のない追悼式の形で執り行われている。

平成10年の追悼式は、回天特別攻撃隊の第一陣菊水隊が出撃した日より五四年目に当たる11月8日、13時30分より厳粛に行われた。御遺族五八名と県、市ほか各種自治体の代表、国会議員、県市議会議員、海陸空の各自衛隊、地元諸団体、会社の代表、地元有志、旧軍関連の団体など、合わせて約九百人が大津島の丘に立つ回天碑の前に参集した。御遺族は、北は北海道、西は鹿児島の全国各地から参加され、そのなかには回天の創始者、故黒木博司少佐の御妹、丹羽教子様のお姿も見えた。

回天記念館は昭和43年11月開館、以来三十年間で延べ三四万人余の入館者を集め、特攻兵器「回天」の歴史的事実を伝えてきたが、本年一月より休館して研修室、収蔵庫を増築し、展示室を全面改修して展示方法、内容を一新するための整備工事を実施していた。この日追悼式に先立って竣工式を行い、再開館した。視聴覚コーナーでは二種類のビデオで説明を受けることができる。

二〇年にわたり活発な演奏活動を続けている「大徳山太鼓・回天」が、漆黒の実物大模型の回天の前で、若い徳山市民男女によって奉納された。勇壮な太鼓の音を聴くうちに、国を、民族を、愛する身近かな人々を護るために、進んで自らの生命を捧げた隊員たちの面影が、次々と眼の前に浮かび、追憶の涙が滲んでくる。

また式典に先立ち、神戸市役所センター合唱団によって、混声合唱組曲「滄海ようたって―人間魚雷回天―」が奉納され、前夜は全国回天会徳山大会の席上、正伝薩摩琵琶普門院流二世宗家、森園史城師によって薩摩琵琶曲「回天特別攻撃隊」が献弾され、力強い琵琶の調べに参会者一同は深い感動に浸った。

本追悼式は毎年11月の第二日曜日に開催されることになっており、来年は11月14日に決定している。小灘利春

# 二つの鎮魂碑

田中市郎衛門
特操2期

**『出陣学徒壮行之地碑』建立五周年の集い**

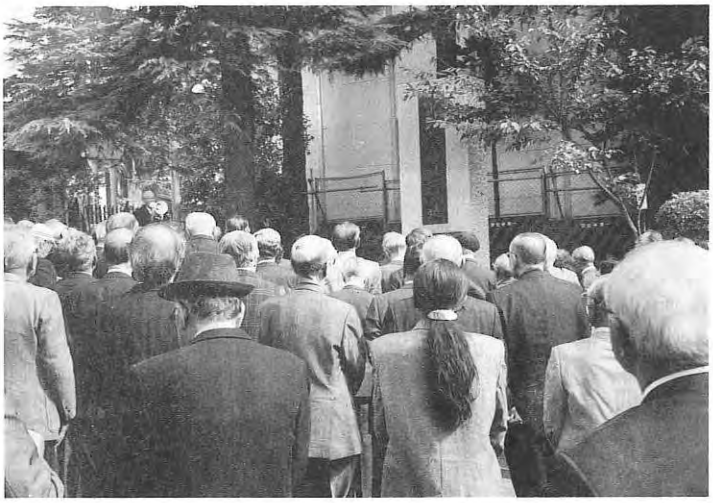
時流れて半世紀余、去る10月22日秋晴れの国立競技場千駄ケ門の『出陣学徒之碑』の前に二百人を越えるご遺族・元学徒兵が参列した。

思えば昭和18年10月21日、秋雨の明治神宮外苑陸上競技場に二万五千人の学徒が集い出陣学徒壮行会が開かれ、12月1日に入隊し、多くの貴重な人材が陸に海に空に征って再び還ることがなかった。

生還した出陣の有志による平成5年10月21日出陣学徒五十周年を記念して、この地に『壮行之地碑』を建立し盛大に除幕された。あの時、碑に献じた詩の作者の田村隆一君もこの程、旅立ってしまった。数々の亡き友を偲び己れの生涯を振り返る日として今年も亦この碑の前にご遺族と老兵が集合した。先づ、同期を父にもつ俳優の石村智子さんから心をこめた詩が朗読された。

十月の雨　　田村　隆一

十月の雨のなかで
消えていった足音は
いま　人はどの耳で聞く　どの耳で
必敗の戦を戦った者たち
きみの黒い瞳の深いところでは
緑の炎がもえさかっていて
涙はじゃまになる　森よ　泣くな
その涙にも緑の炎の色がにじんでいて
雨のなかでも消えなかった炎
灰になった小さな列島　緑の森が燃えつづくかぎり
落葉をふみしめて歩いて行こう　十月の雨



「出陣学徒壮行碑」５年目の集い

続いて今夏、戦争と青春『出陣学徒』を出版した東大十八史会の蟾川寿恵氏から、18年12月陸海に約四九、〇〇〇人の学徒兵が入隊し、９％に当る約四、六〇〇人が戦死したものと思われるとの報告があった。亦、著書によると『航空特攻作戦の戦死者は陸軍では士官の七割、海軍では士官の八・五割が学徒兵であり、18年10月に入隊した一期生を含む特別操縦見習士官、七・八・九期の幹部候補生、同じく18年10月入隊した13期を含む予備学生、生徒出身者で正規軍人コースを進む士官の尖兵として役割に充てられたのではないかとの感を深くする』と記述されている。

**『還らざる学友の碑』除幕式**

除幕式に参列した同期の斉藤陸奥雄君から次のような寄稿を頂戴した。

『還らざる学友の碑』除幕式に参列して

支那事変、太平洋戦争に於いて征きて還らざりし塾生を悼み、この程慶応義塾、三田山上に記念碑が建立された。

季節にしては肌寒い曇り空の十一月七日その除幕式が執り行なわれた。

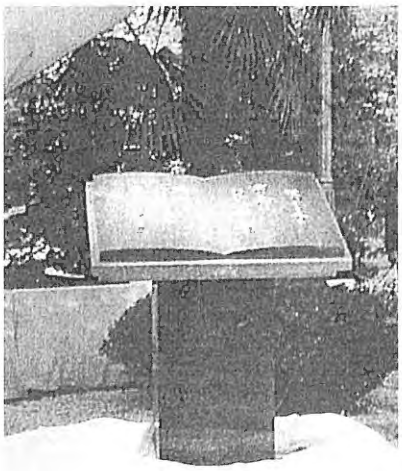
集い来る当時の若者、数百名、今は七十路の老躯にして白頭、白髭なれど元気に旧友と肩を叩き合い再会を喜び合う姿が随所に見られた。

午前十時、ワグネル・ソサエテーのコーラスと共に塾歌斉唱、開会、各年次代表の手により除幕された。

碑　文

「君が心は、われらの胸に生き、君の足音は、われらが学び舎に響きわたる」

鳥居塾長より此の碑の建立に至るまでの経緯につき報告があり、この事業は三十年来の懸案で、今日漸く実現の運びとなった由。その背景には一切



除幕後全員で30秒の黙祷を捧げた

の宗教色、政治色を排し純粋に学業志半ばにして再び還ることのなかりし学友を偲ぶ碑として建てられたものであるとの言葉があつた。

次いで彼等を悼む言葉のなかで、我等、特操二期生として非常に感銘を受けたのは戦没学生の手記「きけわだつみの声」の筆頭に記載された同期生上原良司君の遺書を引用された事である。

彼が、生を享けてより二十余年何一つ不自由なく過ごさせて戴いた父母の恩を感謝し、空中勤務者として上空に上がれば死は恐怖の対象ではないのですと云い、当時の戦局を直視し国難に赴かんとする気概を示すと共に、内に沸ぎる自由主義への憧れを、「昔日の大英帝国たらしめんとする私の夢は破れた」と無念の思いを寄せた彼の心情こそ慶応義塾、福沢先生の精神であつた、と言われ辞を閉じられた。

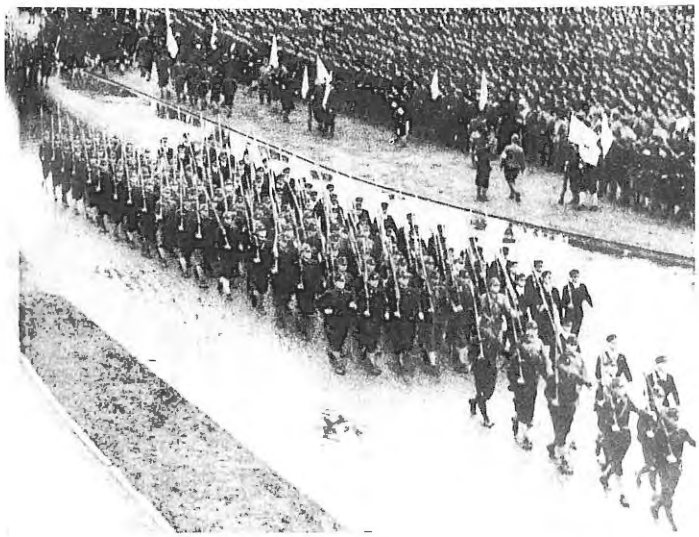
同期の者として、同窓の者として誇りと深い感動で身の熱くなる思いであつた。

五十数年前、同じ晩秋の同じ三田山で挙行された「塾生出陣壮行会」に出席し在校生に送られ三田の山を去つた昔日が走馬灯の様に浮かび全員「丘の上」を斉唱し山上を去つた。

『本も閉じたよ、ノートも置いた、明日はこの手に銃剣とつて、
命ささげて、やり抜く覚悟、三田の想い出えびらの花だ、
征くぞ揃いの赤襷』出陣塾生壮行の歌

これら二つの碑が次代を担う内外の若き世代にこの歴史的事実を伝え、永遠の平和を祈念することは、当時平和を希求し乍ら国難に際し祖先の為に殉じた学徒兵の鎮魂になるのではないかと思料する。

（特操二期）



朗読劇

# 沖縄はるかに

## ―南の空に消えた若き特攻隊員―

文　遠藤京子
絵　松本武仁

我が協会の会員遠藤京子さんは、このような題で朗読劇を作り、機会を求めて公演している。朗読劇とは聴覚だけに訴える劇であり、感情込めた会話が聴衆を引きつける。どれも特攻基地知覧における鳥浜トメさんと特攻隊員にまつわる物語りであり、構成も科白も立派であるが、文章として読んだだけでは声優を介して聞くのに及ばない。そこで、これも会員の松本武仁さんを煩わし挿絵を画いてもらい、写真を加えてみた。

なお、遠藤さんの取り上げた特攻隊員はこれ以外にもあるが、紙面の都合で割愛させてもらった。

**語り**　昭和二十年四月から六月にかけて、南九州の基地から沖縄へ向けて、特攻機が飛び立った。主として陸軍は知覧から、海軍は鹿屋から出撃した。

鹿屋飛行場があった場所は現在、海上自衛隊の基地として使われているが、知覧飛行場のあった丘は、緑の公園に姿をかえている。その片隅に、たくさんの石燈篭に守られた観音像と、特攻平和記念館がある。館内には、隊員たちが大切にしていた万年筆、財布、日の丸や血書のある布などが展示されている。

どの位置に立っても、視線を感じて周りを見渡した……

壁に沿って並んだ特攻隊員四三六人の写真が、じっと私を見つめている。

**トメ**「みんな、わが子んごっごわした。お国のために死ぬっちゅう人を、粗末にはできもはん。隊員の皆さんも、まっこつ母さんのように思うちょっていやした。」

### 勝又勝雄少尉

千葉県出身、特操2期　19年知覧町の太刀洗飛行学校分校で教育を受け、半年後の20年5月に第78振武隊員として知覧に戻り、5月4日出撃散華した。22才

**勝又**「おばさーん！　ただいまーっ」

**トメ**「あれーっ、まあ。どけんしたと？」

**勝又**「元気だった？」

**トメ**「勝又さん、お元気そうですね。すっかりたくましうなって。いやー懐かしかね、何ヶ月ぶりかね。さあ、さあ、上がったもんせ。立派になりなさって。知覧にはまた、どげんして？」

**勝又**「うん、詳しいことは軍の機密だけど、男、勝又、立派にご奉公をいたします」

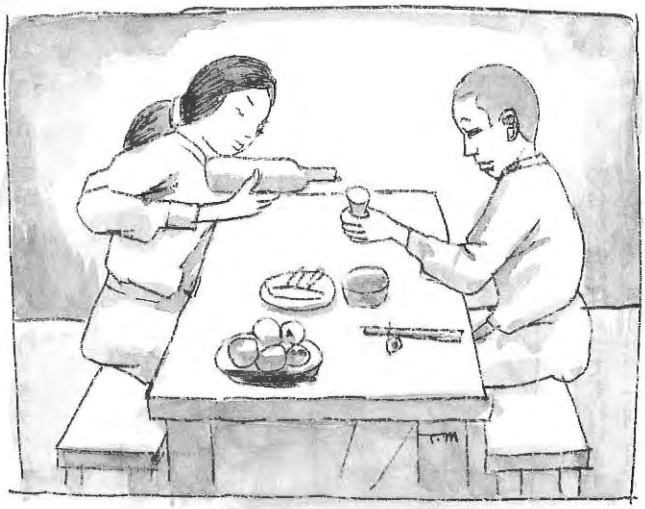
**トメ**「ああそうね。それは、よかこつ。とにかく、ゆっくいしやったもんせ」

**語り**　昭和十七年三月、知覧に大刀洗飛行学校知覧分教所が設けられ、飛行訓練が行われた。昭和二十年に入り、知覧は特攻作戦の前線基地となった。そして、全国の航空隊で編成された特攻隊が隊ごとにまとまって、あるいはバラバラと出撃のために集まってきた。

特攻隊員たちは、基地に到着すると、飛行場の片隅にある三角兵舎に荷物を置き、軍用トラックで町へ降りていった。食事をしたり、酒を飲んだり……。出撃前の数日を、そんなふうに過ごした。トメさんが経営する富屋食堂も、そういう若者で賑わっていた。トメさんは、まもなく出撃するという特攻隊員をかわいがり、なにくれとなく面倒をみた。

勝又少尉は、十九年に特別操縦見習士官として知覧で訓練を受け、半年後、他の部隊へ配属された。そして二十年五月、特攻隊としての出撃命令を受けて、再び戻ってきたのだ。

**勝又**「おばさん、カツマタが行くのだから、日本はかならず勝つ！
　そうだ、俺はもうじき死ぬんだから、残りの命はおばさんあげるよ。だから、長生きしておくれよ」
**トメ**「……腹減っちょらんな？　お茶飲みやんせ、漬物も食いやんせ」
**勝又**「うわー、すごいぞ」
**トメ**「勝又さん、焼酎好きじゃったろ。飲むね？」
**勝又**「いいね
　よーし、今日は飲むぞ！」



**トメ**（回想風に）「私（アタ）やはじめ知いもはんかった。じゃどん次から次へと愛しか子供たちが帰ってくるからうれしいて、うれしいて。じゃどん、あん子たちの任務は……。
　あん子たちは、知覧に帰ってきては次々と沖縄に向かって飛んでいきもした」
**語り**　勝又少尉が友人に宛てた遺書がある。
**勝又**（遺書）「いよいよ出撃も明日と決定。今、すべてを打ち明けます。約半月前、特別攻撃隊を拝命。大任を果たすこととなりました。勝又は、みんなの期待に報いることのできるうれしさでいっぱい。好きな酒を飲んで、祖国の必勝を築きます」
**トメ**「豪快な出撃でした。勝又さんからいただいた命（イノチ）ごわんで、あん子たちのこつ忘れんで、長生きしもんそ」

## 中島豊蔵軍曹

　愛知県出身　少飛12期　20年4月特攻隊員となり第48振武隊として6月3日出撃散華　19才

（トラックの音）
**語り**　今日も、隊員たちを乗せたトラックが山道を登ってくる。
**中島**「おばさーん、中島です！」
（中島トラックから飛び下りようとして、転げ落ちる）
**トメ**「危なか、大丈夫？　おや、中島さん。ちんけ子供みたいやね。気つけてくれんと。どれ、見せっみやんせ」

**中島**「イテー！　おばさんが見えたものだから」
**トメ**「まあ、ありがとう。どうれ――。あれ、これは大変だ、動かさんほうがよかかもしれない。骨が折れちょっとじゃなかとね」
**語り**　愛知県出身、中島軍曹。少年飛行兵として、知覧で訓練を受けた。この日、中島軍曹は、同期で親友の松本軍曹と一緒に五月二十五日にここへ来た。この時の中島軍曹の腕の捻挫は思ったよりひどかったとみえ、数日後、再び富屋食堂にやってきた彼は、白い包帯で左の腕を吊っていた。
**トメ**「まあ、中島さん。まだ良くならんの。こげん暑かとき、そげな腕ではお風呂にも入れんでしょ。立派な飛行機乗りさんが汗くさくてはかっこ悪いからね。あたいが背中を流しもそ」
**中島**「それは、ありがたいな」
（行水の音）

**トメ**「中島さん、こげん体じゃ、出撃もできもはんな。治してからゆっくり行っきゃったもんせ」

**中島**「大丈夫、命令が出ればいつでも行けますよ。日本が勝つためには、自分が、一刻も早く行かなくてはならないんだ」

**トメ**「中島さん、いくちなったと？」

**中島**「十九歳」

**トメ**「……」

**中島**「おばさん、泣いているのか？」

**トメ**「ちょっと腹が痛かもんごわして」

**中島**「そうか、大事にしたほうがいい。それなら、明日の見送りはいいよ」

**トメ**（回想）「次ん日、中島さんは、自転車のチューブで左腕をレバーにくくりつけて出撃していかれもした」

（食堂の喧騒）

## 宇野栄一少尉

滋賀県出身　特操1期　誠第38飛行隊として4月16日出撃散華　21才

「さくらさくら」（ハモニカで二回）

**トメ**　この辺りは、桜ん季節が一年で一番悲しか季節です。あれは、京都出身の宇野少尉とその隊の方たちでした。宇野少尉は学徒出身の方でした。二十一歳になったばかりの、若い隊長さんでした。

あん頃は三角兵舎に入りきれなくて、少尉と隊の方は町んほうに泊まっておられもした。出発が延びたのを知らせたのか、少尉のご両親が面会に見えた時のこつです。少尉は、お父さんには、特攻隊としていくことを言っておられたようですが、お母さんには言っておられんかったとでしょうね。

**宇野（母）**「ここへ来たら、皆が特攻隊、特攻隊と言っているけれど、お前も…その…特攻隊と違うのかい？」

**宇野**「お母さん、私は偵察機だから、敵を見つけてくるだけだよ。心配しなくていいんだよ」

**宇野（母）**「そうかい、それなら安心だね。（うなづく）それでもやはり危ないから、天気のいい日に行かんとあかんよ」

**宇野**「はい、お母さん。みんな一緒ですから、大丈夫ですよ」

**宇野（母）**「早よう、帰ってきなされや。綺麗な、ええ嫁さんを探しておくわ」

**トメ**（回想）「お父さんは、そっと涙を拭いちょられました。

それから何日ぐらいたったあとだったか、朝、まだ暗いうちにトラックが迎えにきもした。

宇野隊長は、出発の前に橋のたもとまで行き、満開の山桜の枝を一本折いやした。そしたら他の隊員さんたちもみんな、枝を折ってはトラックに乗り込んでいきやした。ブーンとトラックが走り出すと、花びらがサーッと後を追うように続いていきもした。

飛行場にかけつけると、宇野さんの隊は、皆さん、飛行帽に桜の枝を飾って整列しておられもした。それは綺麗な、桜の列でした。」

## 光山博文少尉

朝鮮出身学徒　京都薬専卒　特操1期　太刀洗飛行学校知覧分校で教育を受け、20年5月第51振部隊として知覧に戻り、5月11日出撃散華　24才

**トメ**　光山さんという方がおられもした。いつも、奥の部屋の柱にもたれて、一人でお酒を召し上がる静かな方ごわした。

さあ光山さん、もう皆帰ってしまったことだし、こっちへきて飲み直しませんか。

**光山**　おばさん、自分は今日でお別れだ。今夜は、故郷の歌を歌いたい。

聞いてくれるか？

**トメ**　光山さんの故郷（くに）の歌？　どんな歌かね、聞かせやったもんせ。

「アリラン」ハモニカで

**光山**（歌）アリラン　アリラン　アラリヨ　アリラン峠を越えて行く

私を捨てて　行く君は　一里も行けず足痛む

**語り**　光山少尉は、形見としてトメさんに、朝鮮の布で織った黄色い縞模様の財布を残し、翌朝出撃した。昭和二十年五月十一日、第五十一振武隊員として一式戦闘機「隼」に搭乗して。彼の本当の気持ちを知るすべはない。姓名も、歴史も日本のそれに変えて、京都薬学専門学校に学んでいた朝鮮半島出身の学徒、光山少尉ことタクキョンヒョンさん二十四歳は、特攻隊として沖縄の海に消えた。

知覧から出撃した特攻隊員の中には、十一人の朝鮮半島出身者、一人の台湾の人がいた。

## 宮川三郎軍曹

新潟県出身　仙台乗員養成所出　第104振武隊として　6月6日出撃散華　20才

「あっちの水」（ハモニカで）

**トメ**　宮川軍曹は、雪国ん人らしく、色の白い、ヨカニセドンでごあした。いつも一人で沈んじょって、寂しそうでごわした。

なぜかというと、宮川さんはほかん飛行場から特攻出撃して、飛行機の故障で、途中から一人で引き返してきたこつがありもしたからです。死ぬ時は一緒と誓いあった、同じ隊の皆さんが先に行ってしまい、自分だけ生き残ったことを悔やんでおいやしたようじゃった。

宮川さんのような方はほかにもいっぱいお

られもした。そういう衆に、周囲の目は冷たかったでしたね。口には出しもはんでしたが、特攻隊員は、出撃したら生きて帰ってきちょったらいけんかったんです。

6月5日のことでした。明日は出撃というので、やっと先にいった仲間に会えると、親友の滝山さんと一緒にうちに来て喜んでいました。

**宮川**「おばさん、明日は敵艦を沈めて帰ってくるからね」

**れい子**「どげんして？」

**宮川**「うーん、ホタルになって飛んで来ようかな」

**れい子**「ホタル？　どれが宮川さんのホタルか分かるかな……」

**宮川**「僕は、食堂の入口から入ってくるよ」

**れい子**「そう！　何時ごろ？」

**宮川**「夜の九時頃に来ようかな。滝山と一緒だから、追い返さないでね」

**トメ**　私は最初、気に止めませんでした。来る途中でホタルでも見かけたのでしょうか、宮川さんはそんなことを言っていました。

**語り**　翌6月6日、陸海軍は最後の決戦を挑み、多くの特攻機が出撃した。

**トメ**　ところが、夜になって、一緒に出撃したはずの滝山さんが一人でひょっこり帰ってみえました。「宮川は、開聞岳の向こうに飛んでいったよ」といってボロボロと涙をこぼすんです。視界が悪いから引き返そうと滝山さんは、宮川さんに合図を送ったのだけれど、お前だけ帰れとそのまま雲の中に突っ込んでいかれたそうです。

夜、9時頃でした。食堂に娘たちと滝山さん、奥の広間には遺書を書いている隊員の方たちが7～8人いました。すると……

**れい子**「あっ、ホタルだ、宮川さんが帰ってきた」

（鈴の音）

**男1**「宮川！」（ちょっと驚き、不思議なものを見るように）

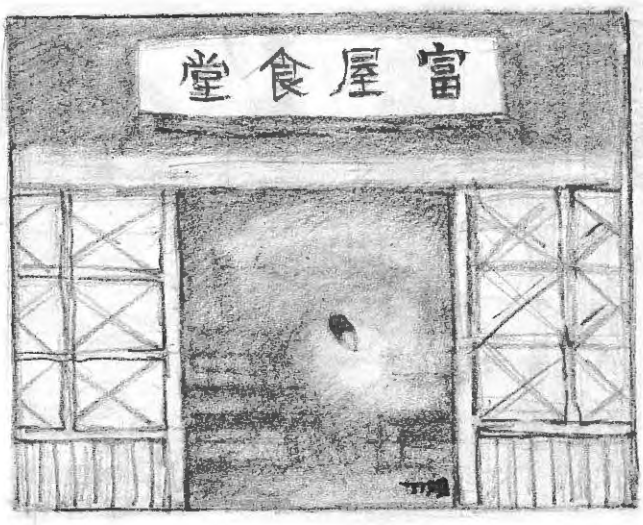
**男2**「宮川！」（戦友に呼び掛けるように）

**トメ**　宮川さんは、ほんのこちホタルになって帰ってきたとです。

**語り**　宮川軍曹の遺品となった日記には「短い二十年の人生を振り返れば、激流のような日々であった」と記してあり、昭和20年4月27日、最初の出撃の前日で絶筆となっている。日記帳の三分の一は余白で残され、裏表紙に和歌が一首あった。

**宮川**　朝夕に　君を思いて　我は征く
　またぞ会う日を　夢に見つつも

**語り**　宮川三郎は向学心旺盛な、努力を惜しまない人だった。工業専門学校を卒業し、勉強の甲斐あって早稲田の理工学部と慶応の工学部に合格した。大学に入り直して勉強を続けるべきか、パイロットになるべきか、兄と十分話し合ったすえ、後者を選んだ。しかし、大きな歴史の激流は、個人のそんな人生設計や目標などにはお構えなしに、人々を呑み込んでいった。



晩年のトメさん

# 鹿児島行
# 知覧よ

（会員）新井有治

さきごろ、靖国神社の社前で号泣している老婆がいたという新聞記事を見ました。

このような情景に対するマスコミの論評は判を押したように形式的で、他人事を扱うそれです。曰く、戦争の犠牲者。それゆえ戦争反対。自分の教え子は、わが子だけは戦場に送るな、と。

そこには既に老婆はなく、あるのは自分だけです。ひと頃、一見「進歩的」な運動が大衆に支持されたのは、利己心をくすぐったからかも知れません。

老婆はおそらく、その息子を戦争で失ったのでしょう。その哀しみは何物を以てしても癒すことは出来ません。きっと、国を護り、国民を守った息子を誇りに思うことを支えにして辛うじて生きて来れたのでしょう。戦後、国も国民も、この哀れな母親が唯一生きるより処にしていたものを奪ったではありませんか。

息子を殺したのは戦争としても、老婆を号泣させたのは、私を含めた日本の社会であります。

戦争を身を以て体験した私たちの生きざまには、多少にかかわらず、戦争が影を落としました。ある人は機械力に負けたとして工学部に入り、ある人は教育で国を建て直そうと教師になり、国民を餓死させまいと食品会社をおこした人もおれば、慣れない農業に身を投じた人もいました。

必死に働いた末、それに幸運もあって今日の繁栄をみることが出来ました。皆が理想と目指していた平和で自由で物の豊かな日本に生きながら、齢とともに心の奥底に満たされぬ空洞が広がってゆくのは何故でしょう。

ニューヨークのビルを買い占めようと、ハワイの土地を占領しようと、たった一枚の絵を百億円で競り落とそうと、ブランド商品で身を飾り立てようと、日本人が「沐猴にして冠する」如くに見えるのは何故でしょう。

物質的豊かさに埋もれて、何か欠落したものはありませんか。歴史と断絶しても飯が食えることを覚えてから日本人が奇怪しくなったと思えてなりません。

私には、いつとはなく、この世の人とよりも、むしろ死者との会話を愉しむ習慣がついてまいりました。

医師として現役を退いたのち余力があれば、出来たら僧形を装って、大東亜戦争の戦跡巡礼を夢みていましたが、二年前、心筋梗塞で倒れ、残念ながら海外まで出掛けにくい状況になりました。しかし、岐阜と大阪の友人は、全国の護国神社の参拝行脚を半ば済ませたといいますし、私もその真似が出来るところまで恢復してきました。そして、内外を問わず、私が先ず訪れねばならないのは知覧の町でした。

知覧。大東亜戦争末期、所謂「沖縄決戦」に際し、陸軍航空特別攻撃隊の基地であり、戦後いち早く町民の中から、その顕彰の事業が起こり現在に至ったもので、戦後のもっとも困難な時期にあって、その運動は際立っていました。

知覧へ行きたい。国家に殉じた先輩に訓えを請い且つお詫びしたい。町の皆さんの誰彼となくお礼を申し上げたい。そして、勇士たちがこの世の名残りに網膜に焼き付けた景色茶畑を、武家屋敷を、富屋食堂の界隈を、それに、開聞岳をこの目で見て、僅かでもあの人達と共通の体験を持ちたい。それが私の願いでした。

同台経済懇話会（陶趣会）の今年の訪問先は南九州と聞き、今度の幹事が五十七期の植田さんと地元鹿児島出身五十九期の吉満さんなら、当然、知覧が日程に組まれると予測して添乗「医」として真先に参加を申し込んだのは、このような理由からでした。

## 五月二十四日（金）

午前三時起床。妻を伴い高崎駅から寝台急行「能登」に乗り上京。羽田発八時三十分。鹿児島空港着、そのままプロペラ機に乗り換えて種子島へ。宇宙開発センターで懇切な案内を受け、鹿児島へ引き返し、霧島神宮参拝。

境内で「さざれ石」にお目にかかりました。

戦後間もない頃、科学者にして進歩的文化人なる者が「日本の国歌は間違っている」などと言いだし、「石が集まって巌をなすとは自然現象に反する」と大真面目で言い出したのです。私は「さざれ石」など知りませんでしたから、自棄（やけ）くそになって「お説はご尤もですが、巌（いわお）は砕けて小石になるよサノヨイヨイでは国歌の体をなさないし、第一、そんな歌を歌う奴がいるかい」と応酬。

いま此処で沢山の小石が寄り集まって、ニョッキリした巨石を形づくっている「さざれ石」なるものを拝観するに及んで、どうしたわけか場所柄も弁えず、可笑しさを堪えるのに苦労をしました。林田温泉に一泊。

**五月二十五日（金）**

高千穂の麓を巡り、この旅の目的の一つである東市来の寿官陶苑を訪ねました。

一部略（編者）

バスは山の合間を縫うようにして知覧に向かいます。鹿児島がこんなに山国とは知りませんでした。

ガイド嬢は「こちらに観光にお出でになる皆さんはもう御承知とは思いますが……」と前置きして、知覧の町と特攻隊員との戦中戦後の関わりについて語り始めました。それは私にとり耳新しいものではありませんが、戦争を知らない少女の語りにしては傾聴に値するものでした。きっと、特攻隊員が現在の彼女と同年輩だったことを意識して訴える所為だと思いました。

バスが知覧の町に入り目的地が近づくと、こんな風に言って説明を結びました。「沢山のお客さんの中には（戦争のことは思い出したくないから話さないで呉れ）と仰言る方もおりました。しかし、私は特攻隊のことだけは話さなければいけないと思います」。

歴史教育に於いて未だ敗戦後遺症の癒えない日本では、観光バス会社は「歴史教育の民間活力」を生かし、バスガイド嬢を教育して日本歴史の〈語り部〉たらしめよ。これが私の持論でした。この度の旅行でその考えを一層強くしました。

突然、舗装された広い道に突き当たり、バスは右折してこの坂道を登ります。路傍の両側に御影石の灯篭が等間隔に整然と並んでいます。聞けば、知覧と縁（ゆかり）のある特攻隊の戦死者千二十六柱と同数の灯をともす計画とのことでした。

バスは大きな食堂に横付けになりました。ここで五十期の二名、そのお一人は武家屋敷の当主。五十七期の三名、お一人は特攻隊顕彰会の理事、の五名の出迎えをいただき、自己紹介を交えた昼の会食となりました。

**（特攻平和公園）**

昼食を終えて、三々五々、特攻平和公園に足を運びました。

そこには有名な特攻隊員の銅像「とこしえに」が建てられてあります。その脚下に戦闘機が置かれ、右手やや離れた所に、当時のモンペ姿をした母の像「やすらかに」があります。

私は、この配置の意図は奈辺にあるかを考えながら一巡し、母の像の背後から凛々しい青年を仰ぎ見ました。

母にしてみれば、己れが産み慈しみ育てた児は遠く高いところにおり、もう手が届かないのです。そして、わが子といえば、肉体の愛着を断ち切ったかのように、その「まなじり」は開聞岳の彼方、沖縄の空へ向けられています。そしてその傍らには、やがて柩となるべき美しい飛行機が恋人のように寄り添っているのです。これを離れて見守る母の顔は優しくも哀しく、とても言葉では表現出来ません。

私は「この顔」に見覚えのあることに気づきました。それは、十六才で陸士に入校するとき、鎮守の森で馬に跨がり、振り返って、見送りの村人の間に母を探したとき、人垣の遥か後ろの狛犬の影で、独り私を見つめていた母のそれと同じものでした。

男が男らしく生き、女が女らしく生きようとした遠い過去（むかし）の話です。

**（特攻平和観音堂）**

このお堂は昭和三十年、知覧町の人達の浄財によって建立され、大和・法隆寺の「夢ちがい観音」を模した像を安置し、像内に千二十六柱の隊員名が記されているそうです。

五十七期の植田幹事が代表して昇殿し、花輪を捧げ、全員が香をたいて合掌しました。

町長さんはじめ役場の職員の方々は、この日休みとこのとでしたが、真夏のように暑い日に、ネクタイ、上着をつけて臨席して下され、「特攻隊の遺跡は、知覧の私たちが必ず守り抜きます」と力強く挨拶されました。有り難いことです。幹事から「我々がしなくてはならないことを地元の方にしていただき、お礼の申しようもありません」と答辞を述べましたが、それは私たち全員の気持ちでした。

**（三角兵舎）**

観音堂の左手奥に杉木立があり、その中に木漏れ日を浴びて、三角兵舎が再現されてありました。中に入ると、ベッドというのはあまりにも粗末な上げ床に、毛布と枕があり、壁に夥しい数の千羽鶴が吊るしてありました。

ふと、陸士の生徒舎を思い出しましたが、それより遥に質素で単に雨露を凌ぐだけのものです。

私も戦争中「いつかは死ぬ」と覚悟をしていましたが、「いつか」というのは気が楽なものです。何故なら、人間は永久に生きられるという錯覚の下に、毎日をわりと平気で送れるからです。しかし、この場合は全く状況が異なります。「いつか死ぬ」のではなく明日か明後日には「必ず死ぬ」のです。

刻々と縮んでゆく現世との接線を、若者はこの狭い空間で過ごしたのです。

容赦なく迫ってくるこの世との訣れを、この部屋で待ったのです。如何にして。嗟乎。

（特攻平和会館）

昭和五十年に開設された遺品館が手狭になったため、昭和六十年から二年がかりで、町の予算五億円をかけて建設されたものだそうです。

ロビーの正面に壁面と見紛うばかりの「知覧鎮魂の賦」と題する大きな絵が掲げてあります。それは、燃え落ちる飛行機から、血に染まった飛行服の若者を三人の飛天（天女）が抱き抱え、さらに三人の飛天がその周りを舞いながら天界に導く図です。飛び散る一枝の桜は、知覧女学校の生徒が（私の代わりに連れていって）と差し入れたものでしょう。

若者の、まだ大人になりきっていない柔らかな姿態、首に巻いた白いマフラーからしてモデルは少年飛行兵出身の隊員でしょうか。

この若者にとって飛天は共に暮らすことのあまりに短かった母なのでしょうか。また、他の飛天は憧れながら未だ接したことのなかった女身の象徴なのでしょうか。

何れにせよ画家は、この高貴な魂を機械（マシン）の中に閉じ込めたまま海底に沈ませるのに忍びなかったのでしょう。それとも、われわれ凡俗の五感を以て感知出来ない時空に、この図のようなことが実際にあったことを、芸術家の感性のみが捉え得たのでありましょうか。

私には絵画を評価する審美眼はありません。まして、号何万円などという世界とは全く無縁です。しかし、感動を惹起するのが芸術というなら、これは紛れもなく名画だと思います。

館内に入りますと、特攻の出撃順に隊別の遺影が掲げられてあります。先ず目をみはるのは、あの頃の貧しい日本の青少年は何と美しい顔をしていたかということで、それは同行の誰もが等しく感じたことでした。

階級の順不同なのは、「三角兵舎の中では、軍の厳しい階級性は全く感じられませんでした」という女学生の手記を裏付けるようです。階級・出身校・年齢を超越して、一緒に死んだ人間同志の絆をいまでも温めているかのようです。所々写真に空席のあるのは、いまだに遺影の見つからない方がおられるとのことでした。（皆が勢揃いしている処に収まって下さい）

案内の係の方は一隊につき二・三名を選んで紹介してくれました。初期、フィリッピン作戦では五十四期前後が隊長でしたが、大戦末期の沖縄戦では殆ど五十七期に代わり、少尉になりたての二十才から二十三才の若い隊長だったそうです。

士官学校出身者は生涯武人を志し、既に下級将校で死地に赴く教育を徹底的に受けていましたからともかくとして、勉学のため大学に入りながら軍籍に身を投じた特別操縦見習士官の方はどんな思いでこの壮途に加わったのでしょうか。

朝鮮出身の方もおります。ひどくハニカミ屋で、下宿の小母さんが「なにか歌を」と所望したとき、帽子を目深かに被り〈アリラン〉を歌った方ではないかと思います。その心情は測る術もありませんが、民族の誇りを死を以て守ろうとしたのかも知れません。その顔が爽やかであるのが、私にとり救いでした。

最年少は少年飛行兵出身の十七才です。当時の私よりたった一才の年上に過ぎません。

少年の頃、小学校で授業を一時停止して、全員校庭に出て空を見上げる行事がありました。やがて、どこからともなく、爆音を轟かせて赤い複葉練習機（愛称・あかとんぼ）が現れて、低空を二度三度、翼を振って立ち去るのです。当時、少年飛行兵の「郷土訪問飛行」といいました。貧しい百姓の子が拳を握りしめ、瞳を輝かせて凝っと見ていたのを思い出しました。

その後、少年が藁屋根に登って手を振りつづける両親に、誇らしげに翼を振って応え得たかどうかは定かではありません。確かなのは、あれから何年も経たないうち、隊長機の後ろにぴったりと寄り添いながら、開聞岳に翼を振って哀しい別れを告げたまま帰って来なかったことでした。

少年の短い人生の軌跡を、私は眼を閉じて想っていました。

館の中央には沢山の遺書が保存され展示されてありました。

何れも見事な筆跡で、己れの束の間の人生の終結の表現は一つとして心を打たないものはありません。人之将死其言也善（曾子）。

一つ一つを言挙げ出来ませんが、最も短い遺書があり注目を引きました。「一度死んで見るべェ」と記してありました。

「死」。誰れ一人体験したことのない未知なるもの。それに赴く心境を表す言葉を、若者は持ち合せてないでしょう。いや、いくら言葉を探したとしても、既に言葉そのものが無力でありま

しょう。この一見おどけたような遺書の中に、私は、いかなる哲人、高僧でも容易に到達しえない境地を垣間見るのです。

私は居たたまれない思いでロビーに出ました。そこに居る人は、皆、申し合わせように無口でした。時間を延長して下さるという幹事さんの配慮で、私はもう一度、館内に飛び込みました。ハンカチで顔をおおって館内を大急ぎで一回りして、遺影の一人一人に心の中で叫びかけていました。

（皆さんの後に続くことは出来ませんでした。醜く老いたとご覧になるでしょう。私も自分をそう思いつづけてきたのです。しかし、私は知っています。人間にとって大切なものは、如何に長く生きるかでなく、如何に生きたかであることを。皆さんのことは生涯忘れません。私に出来ることは「忘れない」ということです）。

ガイド嬢によれば、年間、数十万の人が知覧を訪れるそうです。

年配の人は、富と引換えに失った何かに気付くでしょう。

若い人達は、日教組が否定し、文部省が意気地なくも触れるのを拒んだ凄絶な犠牲的精神の発露をここに見るでしょう。

戦争など決して美化されるべきものではありません。しかし、悲惨な戦の場（にわ）に咲いた勇士達の生き様、死に様は子々孫々に語り継がねばなりません。これを無視すれば人間の尊厳を否定することになります。何故なら、人間の尊厳とは限りある肉体ではなく之れを統御する「精神」だからです。

戦争が終わったとき、勝者と敗者の間に際立った相違がありました。

戦勝国では、国を守るため勇敢に戦った戦士を讃え、その遺影を高く掲げて行進し、その栄誉を永久に顕彰する作業にかかりました。敗戦国では死者を美化するなという運動を起こしたのです。

当時、勝者に媚び、反動に諂った者達に、是非、今からでも知覧を訪れるよう勧めたいのです。戦後、既に亡き特攻隊員に対し、生命を粗末にした愚か者と嗤った者。軍国主義の手先と非難した者。彼らの笑顔は写真用の作り笑いと、したり顔で語った者。はては、麻薬を注射されて無理やり飛行機に乗せられたなどと言ったデマゴグ。己れの怯懦な心、狭量の器で量りえない日本の男が実在したことを認めればよいのです。

今にして老婆を、靖国神社の社前で独り号泣させてならないと思うのですが如何でしょう。

池田湖へ行く予定は時間がなくなり中止となりました。この湖に棲むという原始生物の「イッシー君」。それに鮎ほどの魚を一と呑みにするという「鰻の化け物」との対面はなりませんでした。（おヌシら、せいぜい、湖畔のお土産屋の小母さんの懐を豊かにし、鹿児島県の観光収益の増加に貢献するがいい）。

指宿へ向かうバスの車窓に開聞岳が見える筈でしたが、折からの入梅で姿を見せてくれませんでした。指宿に一泊。

## 五月二十六日（日）

指宿から鹿児島市に向かうバスの中で、幹事の植田さんから、（特攻隊慰霊の献灯の提案をするように）と私に耳打ちがありました。心を見透かされた気がしましたが、一行の中には、かつての南方軍の参謀や支那派遣軍の参謀の方もおられますし、知覧から飛び立った五十七期生のうち三名を士官学校で直接教育した五十期の元区隊長もおられます。

（この方は自分の教え子の遺影の前で直立不動の姿勢をとって、かつての生徒の名を呼びながら泣いていた、と、そこにたまたま居合わせた人の話で知りました）。

献灯の提案は、先輩や縁（ゆかり）のある方々を差し置くのは失礼と辞退しましたが、「いいからやれ」とのことでした。忽ち募金はなり、不足分を先輩が補足することで、一灯を献ずることが出来ました。この件は年長者に以心伝心の了解があったらしく、最年少の私に提案者の役を下さったもののようです。

鹿児島市は地元の人が驚くほどの暑い日でした。城山に上り市街地、鹿児島湾の彼方に桜島を望みましたが、山頂は雲で見えません。磯公園には、昨年、知覧で迎えて下さった方々の他に、鹿児島偕行会の人達もお出でになり、公園内の秀成荘で賑やかに会食したのち見送りを受けて、バスは加治木の龍門司窯に立ち寄り、簡単な見学を済ませたのち、再び鹿児島空港に向かいました。

バスを降りるとき、私はガイド嬢に、そっと「ここを訪れる観光客に、私たちにして下さったと同じように、特攻隊の話をしてあげて下さい」と頭を下げました。戦争を知る由もない少女は「判っております」と屈託のない笑顔で応えたものでした。

梅雨に入った鹿児島空港は雲が厚く、窓外に未練がましく開聞岳を一目なりと探しましたが、叶いませんでした。

地方自治体が知覧にみるような戦争の遺跡を保存する困難さに思いを巡らせないわけにはまいりません。将来はどうなるのでしょう。心ある人の意に反しながら、便宜上、観光という名目にすれば可能でしょうか。

それとも、外国の著名なジャーナリストの言葉のように、「特攻隊は近代における人類が、自己の生命より大切なものの存在を証明しようとした人類文化史上、特記すべき記念塔だ」とすれば、国の文化財として保護する道がありましょうか。しかし、自治体で忠魂碑に供えた花代まで憲法違反と訴え出る住民が珍しくない昨今の風潮からして、知覧の町にはそんな輩は居まい、出ないで欲しいと願いながら、万一、その事態がこの町で生じたときは、その時こそ、法そのものを問う世論が高まらねばなりません。

憲法といえども、所詮、法は人がつくり、それゆえ人の変え得るもの。歴史の営みの中には、変え得ざるもの、変えるべからざるものが確かに存在すると信ずるからです。

知覧の町の皆さん、特攻隊顕彰会の皆さん、有り難うございました。

祖国の見収め開聞岳

祖国に最後の夢を結んだ三角兵舎

# 原町飛行場関係戦没者慰霊祭に参列して

谷尾侃　士58期

吾々58期生は航士卒業後、単発襲撃分科20名、双発襲撃分科25名が満州勃利郊外の青山堡飛行場の第23教育飛行隊（長、森壬子郎少佐、47期）で乙種学生課程の戦技訓練に励んだ。

卒業後、満州移駐まで約一ヶ月、単襲は原町、双襲は那須黒磯で過したのであるが、単襲の八牧通泰君はこの縁で戦後原町に居住（元来は高知）、同地育ちの加藤美喜子さん（戦時下の一少女の日記「いのち」著者）と結婚し、ヤマキ薬局経営の中、同飛行場関係戦没者を始め、同地出身大東亜戦争戦没者の慰霊顕彰に尽力している。

同君から現地慰霊祭を10月10日に執行する旨、案内された。特に本年は、彼長年の懸案であった「原町戦没航空兵の記録」を御遺族、戦友の協力を得て、森鎮雄君（58期）と共に600頁近い大作に編集完結した記念すべき年でもある。快く出席を約した。

**慰霊碑、慰霊祭について**

原町飛行場は昭和14年建設に着手、15年1月熊谷飛行学校分教場として発足してから、明野、水戸、鉾田各飛行学校へと所管替えされて、重爆、戦闘通信、襲撃分科の訓練に供され、20年3月以降は本土決戦特攻隊練成基地となっている。

当地で訓練を受けた襲撃分科57期生の生存者が昭和45年、昔を偲んでこの地に同期生慰霊祭で集ったのがきっかけとなって、飛行場としての慰霊碑建立の議が起り、翌年8月15日、除幕、第1回慰霊祭が行われている。本年は数えて第28回である。

碑は市中心部より南西方向、陣ヶ崎公園墓地高台の北端に位置し、飛行場跡地「ひばりヶ原」を背に南面して建てられている。航空兵の像を中心に左に飛行場関係戦没者296柱の芳名板、右に原町出身大東亜戦争戦没者465柱の芳名板の三者で構成されている。真に風光明媚、見晴らしよく、聖地に相応しい。立地について当時の市長始め、当局の格別の配慮があった由、何とも嬉しい限りである。

式は碑前広場に祭壇を設け、隣接鹿島町の伊勢大御神宮司森鎮雄氏（58期、歩）が斉主となって執行された。祭壇両側には各種団体が供えた花籠約十基が並び、碑前地面には遺族外有志からの100近い花束があり、厳かな中にも盛会を彩っている。

斉主祝詞奏上に続いて慰霊顕彰会事務局長として八牧氏の挨拶、来賓、戦友、遺族代表7氏による追悼の辞奉呈、「原町戦没航空兵の記録」献本、メンネルコール合唱団による鎮魂歌8曲の献歌、各代表玉串奏奠、参列者全員の献花と進み、最後に遺族代表川上正一氏（54期修氏令兄、本人海兵68期）池田十伍氏（原町在住、兄弟2名が中支、ガダルカナルで戦死）の挨拶で終った。

皆さんの言葉の中に、経済的繁栄に反し、精神的荒廃を来している現状に敢然として立向う決意の披瀝と英霊の一層の御加護を願う旨が述べられていた。而して突如一陣の強風吹来り、花籠数基が倒れる事態となった。八牧君の話では、例年追悼の辞終り近くにこの現象があり、関係者としては英霊の感応し給う処と有難く受止めているとの事であった。

北は札幌、西は岡山、京都等御遺族、戦友の遠路参列を始めとする200名近い盛儀であった。事務局の尽力労苦は素より、現地有志の奉仕活動には心から敬服した。接する方々皆、郷土愛強く、人情豊かな人士ばかりだった。

「いのち」「航空兵の記録」両誌に所載の先輩諸公の遺稿を拝読すると、皆が皆、物凄く原町を懐しんでおられる。短期間の在留で何故こんなにもと不思議に思っていたが、この度じかにこの豊かな人情に触れて、漸く納得させられた。

どうぞ、諸霊、この地に
安らけく鎮まりましませ……

**お願い**

「いのち」「原町戦没航空兵の記録」二誌についてはヤマキ薬局（TEL・FAX〇二四四－二三－二七六五）に申込まれればよい。

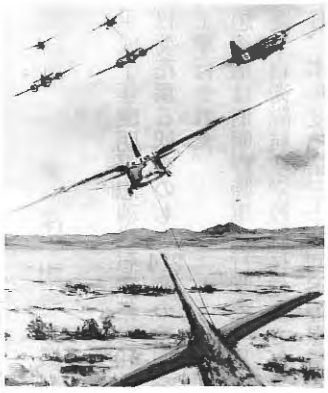
是非、購入、御一読の程をお奨め、お願い申上げる次第である。

# 川南護国神社例祭

田中賢一

この護国神社には地元出身の英霊六三四柱のほか、この地を主基地とした陸軍挺進部隊の戦死者一万有余柱もお祀してあって、毎年11月23日に町長が会長になっている奉賛会が主催し、盛大な祭典が行われている。このことは既に毎年この会報で紹介しているので、今回は我々が町に寄贈し例祭当日は境内に展示される油絵を紹介しよう。これは特攻慰霊協会会員の松本武仁画伯の筆になるもので、カラー印刷でお見せできないのが残念である。

油絵は20号で全部で17点ある。これとは別に地元出身の御祭神に奉った100号の大作もある。ここに紙面の都合でそのうちの7点を紹介する。



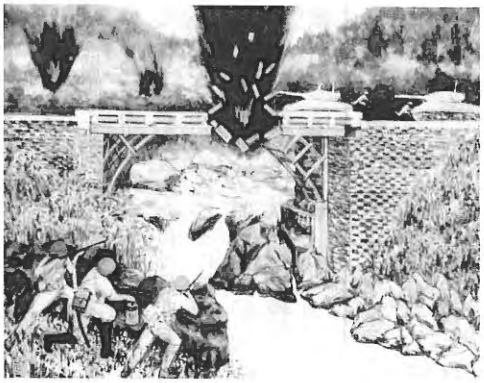
滑空機曳航

唐瀬原における降下訓練

17年7月27日宇都宮飛行場に於て天覧演習が行われた。

パレンバン作戦は17年2月14日に行われた。精油所は一個中隊で奪取した。

高千穂部隊（第2挺進団）主力は19年12月6日夕刻レイテ島ブラウエンに降下。



滑空歩兵第1聯隊作業中隊はルソン島イリサン橋梁を爆破し敵戦車を阻止。

挺進戦車隊は「ク」7滑空機で空輸する戦車隊だったが、実戦には参加しなかった。

## 明野忠魂塔慰霊祭

深川　巌

平成十年度明野忠魂塔慰霊祭は10月23日菊花薫る秋空のもと274名の参加を得て挙行された。

忠魂塔は旧明野陸軍飛行学校、現在の陸上自衛隊航空学校内に建立されてあり、本年度で第三十九回追悼慰霊式を迎える。今回から慰霊追悼の式典は陸上自衛隊で執り行うこととなり、執行者は陸上自衛隊航空学校長兼明野駐屯地司令　陸将補吉田顕彦氏である。

追悼の辞は吉田陸将補及び明野忠魂塔顕彰会谷口正義会長から夫々述べられ、幾多の先輩の忠烈、戦後訓練中職に殉ぜられた方々の国家防衛のための至誠を深く感じた。司会者から紹介される忠魂塔記銘の戦隊名を陸続として聞き入る時、国を守ることの厳しさを肝に銘ずると共に、颯爽として佇立し微動だにしない若い自衛官を見る。やがて、構え銃から天空への一斉射撃音は在天の諸英霊へのご慰霊とともに、力強い祖国防衛の覚悟の発露であり、後に続くを信じた諸先輩を立派に受け継ぐ姿に見えた。

顕彰会懇親会は大食堂で吉田陸将補以下陸自幹部との懇親会食となった。各テーブルに夫々陸自幹部一名を囲み婦人自衛官の湯茶接待までいただき、誠に有り難いことであった。

つくづくと航空の総本山、明野に縁を頂いたことを感謝し、今後とも陸上自衛隊航空学校内の明野忠魂塔に参ずることを誇りとし、生き甲斐としたい。

陸上自衛隊航空学校、明野忠魂塔顕彰会の皆様に深く感謝申し上げます。

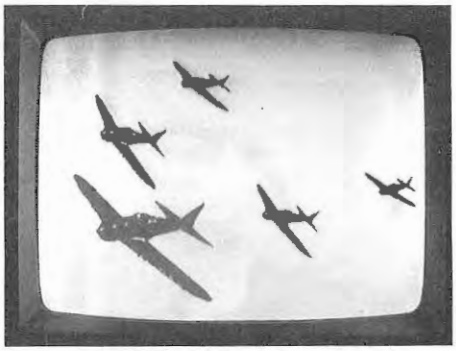
## 第一御楯隊の慰霊祭に参列して

田中賢一

第一御楯隊の史実については、昨年ビデオを作成し更にそのナレーション全文を会報35号に掲載しておいたので、重ねては述べない。第一御楯隊の誘導に任じた彩雲二機のうち一機は未帰還で、無事帰った一機の搭乗者三名中一名はその後戦死、一名は戦後病没し、現存者は我が協会会員の西村友雄さん一人になった。

西村さんはビデオの中で言っている〝私が坐っていた彩雲の後部座席は、他の飛行機と違って後の見張りがし易いように後向きでした。従って私は、二時間半の誘導中零戦12機を正面に見ながら、向き合っていたわけです。その間零戦隊員の決死の覚悟を思うと、万感胸に迫るものがあり、私はもしもこの戦争で生き残ることがあったならば、この状況を遺族に伝えなければならないと、心の中で固く誓いました〟

西村さんはその誓を果しただけでなく、毎年サイパン突入の日11月27日に靖国神社で慰霊祭を行い、本年は二十二回目だという。遺族も追々老齢となり、本年参列したのは隊長大村謙次中尉の令兄の一家だけだった。それに大村中尉の同期生二名と特攻慰霊協会から二名の計10名だった。



ビデオの一画面
誘導機と別れて南下する零戦隊

ビデオについては度々紹介したが、第一御楯隊と義烈空挺隊が一本のテープに収めてあって、上映時間は45分、まだ持っておられぬ会員は是非お求めになって、機会あるごとに特に若い人に見せて頂き度い。頒価五、〇〇〇円（送料別）事務局に申込めば郵便払込用紙同封して送ります。

**特攻絵葉書の活用にご協力を**　少しでも多くの人に特攻隊を認識してもらい度く、八枚一組の絵葉書を作りました。郵便として活用して下さい。封筒入り一組400円送料別。